

若紫卷における紫の上の呼称

——十種類の呼称が描くもの——

鵜飼 祐江

一

若紫卷では、紫の上に十種類三十余例の呼称用例が確認でき、特に、登場時には集中して、「女子」「子」「人」「若草」「初草」「児」など複数の呼称が確認される。一方で若紫卷も後半になり、紫の上が源氏のもとに引き取られるという話が進むに従って、「若君」や「君」という呼称が用いられるようになっていく。前に挙げた「女子」以下の呼称の用例が一〇二、多くて三例ほどに留まっているのに対し、「君」は八例、「若君」は五例用いられており、呼称が統一されていくことが窺える。換言すれば、「若君」「君」呼称の登場までは、紫の上の呼称が定まっていなかったと考えられる。

若紫卷においては、この他に「幼き人」「ゆかり」という呼称が用いられているのだが、では、なぜ若紫卷では紫の上に対して、多種類の呼称が用いられるのだろうか。一見するとこれらの呼称は、紫の上の幼さを捉えた呼称、幼いということをさまざまな角度から呼び分けた呼称のようにも見えるのだが、一つずつ用例をあらっていくと、必ずしも「幼い」ことばかりを物語る呼称でもないようだ。本稿では、若紫卷で紫の上に用いられる、十種類の呼称とこれ

に関連すると考えられる「姫君」という呼称を交え、幼少期の呼称の分析を通して、登場当初の紫の上がどのような人物として表現されているのか、またその主題的意義について考察することにした。

二

瘡病^{わらわび}を患った源氏は、北山で紫の上を見たとき、

さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。(若紫一〇六)⁽¹⁾

と紫の上を捉えている。ここで用いられる「女子」という呼称は、『新日本古典文学大系』などでは脚注に取り上げられることもなく、『日本古典文学全集』で「走ってきた女の子は」と訳されるように、年齢的に幼い女の子、いわゆる「少女」を示す語として捉えられてきた。しかし、むしろこれは、「誰かの」娘」と理解すべき、注目される語なのではないだろうか。それというのも、『源氏物語』に用いられる二十四例の「女子」のうち、「をかしげなる女子ども」(若紫二〇一)と「走り来る女子」(若紫二〇六)の二例を除く二十二例は、すべて、息子・娘のうちの「娘」を指して用いられており、「女子」に年少者の意味は窺えないのである。以下に確認する。

(1) 「幸ひにうち添へて、なほあやしうめでたかりける人なりや。老ひの世に、持たまへらぬ女子をまうけさせたまつりて、身に添へてもやつしゐたらず、やむごとなきに譲れる心おきて、事もなかるべき人なりとぞ聞きはべる」(少女三五)

(2) 「何かは。かしづかむと思はむ女子をば、宮仕につぎては、親王たちにこそは見せたてまつらめ。ただ人の、すくよかになほなほしきをのみ、今の世の人かしこくする、品なきわざなり」(若菜下一六一)

(1) は大宮が、明石の姫君を源氏の娘として「女子」と呼んでおり、このとき明石の姫君は五歳と考えられ、年少者に用いられている例である。一方、(2) は式部卿宮が娘の結婚を考える場面であり、適齢期の女性に用いられている。また、「女子」などを持てはべらましにだに」(梅枝四二二)と仮定の話の中で、対象人物が明確でない場合に一般的な娘を意味しても用いられ、その他「女子の方」(若菜上二二七)と三代に渡る女系の血筋を指す例から、年齢というよりも性別が重視される語であることが窺える。つまり、「女子」は、現在の「女の子」「少女」を指す語ではなく、身分・年齢に制限なく、息子・娘のうちの「娘」を指す語なのだと考えられる。

ところで「をかしげなる女子ども、若き人、童べなん見ゆる」(若紫二〇一)の「女子ども」については、「娘たち」と解釈するのは困難であり、「少女たち」と解したい箇所である。しかし、この用例については、「女子ども」ではなく、「女、子ども」と読点をおくことで、「女とその子どもら」の意で解することができる。このように考えると、『源氏物語』における「女子」は、やはり「少女」一般ではなく、「(誰かの)娘」を指す語なのだという。そして、この「女子」の意味合いに照らし合わせると、紫の上が「走り来る女子」と呼ばれているのは、源氏の眼にこの子が「少女」ならぬ「(誰かの)娘」として映ったことを意味するものと考えられる。しかし、はじめて逢った見知らぬ子を、親と目される人物もいないままに「(誰かの)娘」と捉えるのはいかにも不自然である。ここで注目されるのが、源氏が紫の上を目にする直前に祖母の尼君を見ていることである。

中の柱に寄りゐたる尼君、ただ人と見えず。四十余ばかりにて、いと白うあてに痩せたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうちくしげにそがれたる末も、なかなか長きよりもこよなういまめかしきものかな、とあはれに見たまふ。(若紫二〇六)

尼君の顔見上げたるに、少しおぼえたるところあれば、子なめりと見たまふ。(若紫二〇六)

源氏は、尼君と紫の上の面差しから、二人を親子であろうと推測している。尼君を祖母ではなく、母親と判断したのである。これは、紫の上の素性を探る際に、「かの大納言の御むすめものしたまふと聞きたまへしは。すぎずきしき方にはあらで、まめやかに聞こゆるなり」(若紫二二)と、紫の上を尼君の娘と想定した聞き方をしていることから確認できる。

しかし、実際には、紫の上は尼君の娘ではなく、「女子」と呼ぶのにはふさわしくない。呼称は人物の特徴や役割を印づけるものであるが、ここでは、源氏の視線を通して捉えられた「女子」という呼び方によって、紫の上には「尼君の子ども」だ、という誤った情報が印づけられている。しかも、紫の上の素性が明らかになるまでのしばらくの間、この情報が訂正されることはなく、紫の上の正体は故意に歪められ、「子なめり」と曖昧なまま、「謎の少女」として位置づけられてしまう。

このとき、乳母の「少納言」については、紫の上の後見であること(若紫一〇六)や、女房名までもが明かされている。源氏の観察の中に真実を混在させることで、尼君と少女が親子であるという誤った情報をも事実のように溶け込ませ、読者に疑わせない工夫が施されている。

紫の上を「誰かの」娘だとはじめから認識していながら、改めて「子なめり」と認識する心中思惟が描かれるのは、「女子」だけでは、誰の子であるのかという認識にまでは踏み込まないからだろう。読者からしてみれば、いくら「女子」と呼ばれていても、十歳余りの「娘」の母親として、四十歳余りの尼君をすぐに想定するのは無理がある。

しかし、北山で走り来る紫の上が、源氏の目に「女子」として飛び込んできたとき既に、源氏のなかには先ほどの尼君の娘だという、後に「子なめり」の心中思惟で明示される連想が働いていたのではないか。紫の上を誰かの娘を意味する「女子」とし、他の子どもらを「子ども」と呼び分けるのは、走り来た少女の顔立ちが、他の乳母や女房ら

の「子ども」とは異なる飛び抜けて優れたものであり、源氏の関心を惹いたためであるだろう。そして、尼姿でありながら「いまめかし」と源氏の目に好ましく映り、心惹かれた先ほどの尼君と、無意識のうちに母子と捉えてしまったのである。「女子」は、そうした源氏の心の動きの奥底を照らし出す呼称なのである。

三

少女を尼君の「子なめり」と推定した源氏は、つづいて少女の訴えに応じて立ち上がった女房を、「少納言の乳母とこそ人言ふめるは、この子の後見なるべし。」(若紫二〇六)、少女の世話役であろう、と推察する。ここでは紫の上は、「子なめり」を受け、「この子」と呼ばれている。

「子」は『源氏物語』中に八二例用いられ、自身の子を「我が子」(関屋三六五・玉鬘二一五・蜜二一九・若菜上一〇七・東屋四四・八二)と指す例からも、「子」が何某の息子・娘を指して用いられることが明らかで、対象人物が特定できる場合が多い。年齢に制限はなく、幼子でなくとも用いられている語である。複数の子どもを意味することもあるが、基本的には特定の一人を指すが、「この子」という「指示語＋子」のかたちをとる語から窺える。

「指示語＋子」の呼称の中で「この子」については、空蟬の弟の小君に八例、紫の上に一例、中の君の女の童に一例、浮舟の弟の小君に四例用いられ、これらの例は指示語によって対象が限定されている。

「この子」は小君に対して集中して用いられるが、紀伊守による「故衛門の督の末の子」(帚木九六)「かの、ありし中納言の子」(帚二〇五)といった紹介を受けた表現で、「この子」には「例の中納言の子」という語感がある。一方で源氏の後押しによって「殿上童」として使われるようになり、「小君」という呼称が定着してからは、「この子」という呼称が見られなくなることから、まだその人物像、なかでも社会的位置が定まっていな段階でよく用いられる

呼称であるらしい。この特徴は、女の童や浮舟の弟など特定の人物でありながら呼称のないものによく用いられることから窺える。

「この子」と呼ばれる若紫巻の紫の上の場合も、まだ社会的位相はよくわからぬままに、単なる「先ほどの（尼君の子）」として源氏の目に映ったことが推し量られるわけである。その一方で、「あまた見えつる子どもに似るべうもあらず」（若紫二〇六）と他の子どもたちとは差別化され、雀の子を逃がしたと泣いていた紫の上の姿がずっと源氏の注意を引き続けていることが、「この子」と取り立てて認識されていることから窺えるのである。

同じく「指示語＋子」のかたちをとる「その子」は、夕顔の西の京の乳母の子に一例、紫の上に一例用いられている。

夕顔の西の京の乳母の子の用例では「三人その子はありて」（夕顔一九三）とあり、「その」は「子」ではなく、母である西の京の乳母を指しており、紫の上に対して用いられる「その子」においても、「その」は紫の上ではなく紫の上の母を指し、紫の上を「その母」の娘だ、と理解していると考えられる。

北山で源氏の心を捉えた紫の上の素性はその場では追求されることはなく、後に招かれて訪れた僧都から尼君の亡くなった娘の話を聞くことによって、明かされることになる。

さらば、その子なりけり、（若紫二二三）

ここに至って、源氏の誤認によって与えられた尼君の「女子」という誤情報を、尼君でなく、尼君の娘の「その子」であったのかという源氏の得心によって払拭し、紫の上の血筋を明らかにするのである。

以上のように、若紫巻で紫の上に用いられた「女子」「子」など、一般的に幼子を指すと考えられがちな語は、実は年齢に制限なく用いられるものであり、社会的な位置づけや身分的なものに制約されずに、何某かの子どもであると

いうことだけが重視される語であった。当初「女子」として捉えられ、その後も「この子」「その子」と繰り返し言及され強調される「子」という呼称には、一つには、少女の身分的社会的地位がまだ曖昧であること、もう一つには、源氏がそうした少女の血筋に非常な興味関心を抱いていたことがあらわれているのである。

四

若紫巻で紫の上に用いられる呼称のうち、「幼き人」も紫の上の幼さを捉えた呼称と考えられる。これは、「人」に他の語が付随する複合型の「人」系呼称の一種である。⁽²⁾紫の上には、若紫巻において「幼き人」の他に「ねびゆかむさまゆかしき人」(二〇七)「あはれなる人」(二〇九)「あやしき身一つを、頼もし人にする人」(二二八)「うしろめたげに思へりし人」(二四〇)などの「人」呼称が見られ、大きく捉えて、源氏や尼君、乳母といった人物の紫の上に対する思いが投影されていると考えられる。さまざまなかたちをとり得る「人」呼称では、その場そのときの感情や価値観が投影された、一度しか用いられない呼称となる傾向がある。若紫巻の紫の上に一回的な「人」呼称が多用されるのは、このときの紫の上が、社会的な地位などよりも、一対一で向き合う人物のそのときそのときの感情を重ねることで造型されていることの反映である。それはまた、物語内での位置づけが確定していないことのあらわれでもあらう。

しかしながら「幼き人」は、一回的に用いられる大方の「人」呼称とは異なり、これで一つの定型をなし、繰り返し呼称として用いられている。紫の上には作品中で五例が確認され、特に若紫巻に四例と集中して用いられている。そもそも「人」呼称にそう呼ぶ人物の気持ちや感情が投影されるのであれば、「幼き人」もまた、ただ年齢的な幼さを表す呼称というのではなく、「幼し」と捉える人物の慈しみの情が込められた呼称であると考えるべきだろう。

(1) いとすぐげに荒れたる所の、人少ななるに、いかに幼き人おそろしからむと見ゆ。(若紫二四〇)

(2) 「かかる所には、いかでかし¹ばしも幼き人の過ぐしたまはむ。なほかしこに渡したてまつりてむ。何のところせきほどにもあらず。乳母は、曹司などしてさぶらひなむ。君は、若き人々などあれば、もろともに遊びて、いとうものしたまひなむ」(若紫二四七)⁽³⁾

(3) しかじかなんと聞こゆれば、口惜しう思して、かの宮に渡りなば、わざと迎へ出でむもすきずしかるべし、幼き人を盗み出でたりともとき負ひなむ、その前に、しばし人にも口がためて、渡してむ、と思して、「曉、かしこにもせむ。車の装束さながら、隨身一人二人仰せおきたれ」とのたまふ。(若紫二五二)⁽⁴⁾

(4) 「幼き人は大殿籠りてなむ。などか、いと夜深うは出でさせたまへる」(若紫二五三)

「幼き人」は『源氏物語』中に二〇例確認でき、その多くは、親から子に対して用いられていると考えられる。一方で、空蟬から小君という姉弟間や、少納言から紫の上、乳母から玉鬘のように女房から主人に対して、また、主人である中の君が女童に対して用いる例、薫から常陸の介の子どもに対して用いる例なども見られ、「女子」「子」とは異なり血縁親子関係に限らない呼称、後見が庇護者を大切に慈しむ呼称であると考えられる。十七例が会話文、他の三例のうち二例も会話文に準じて用いられ、親あるいは乳母などの庇護者が、低年齢の幼子と呼ぶ呼称として用いている。右に挙げた紫の上の例を確認すると、(1)(3)は源氏の心内、(2)は兵部卿宮による会話文、(4)は少納言による会話文の例となっている。

用例(3)で少納言が用いる「幼き人」は、源氏の夜分の訪れを他所からの帰途かと訝る少納言による、紫の上の発達の未熟さを前面に出しての応答であり、また、源氏の不躰な来訪を受ける紫の上の頼りなさが色濃くあらわれた呼称ともなって、主従関係が明確な「若君」よりも紫の上を哀れに思う少納言の憐憫の情がこもったものとなっている。

る。用例(1)(2)の「幼き人」も、やはり年齢的な幼さにとどまらない、紫の上への慈愛を込めた呼称となっていると考えられる。「幼し(長無し)」という語がそもそも持つ語感によるのだろうか、「幼き人」という呼称には、年齢的な幼さもさることながら、心細い状態にあるものの未熟さや頼りなさを思う気持ちが含まれているのである。換言すれば、肉親でも後見関係にあるのでもない、いまだ親しくもない少女を、源氏が一度ならず「幼き人」と捉えるのは、源氏の過剰なまでの紫の上への想いの投影に他なるまい。

紫の上を実際に二条院に引き取る以前から、源氏の心内語で繰り返し「幼き人」と捉えられる理由を考えたとき、注目されるのが「ねびゆかむさまゆかしき人」(若紫二〇七)という呼称である。源氏は、北山で紫の上を見たとき、「さるは限りなう心を尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり。」(若紫二〇七)と紫の上と藤壺との似通いを意識して「ねびゆかむさまゆかしき人」という長い修飾部を冠する「人」呼称を用いていた。紫の上の素性に関わりなく、源氏の目によって藤壺との似通いが確認され、深く源氏の心に焼きついたことを示していたのがこの「人」呼称だったのである。源氏が実父兵部卿宮や乳母の少納言と同様の、あるいはそれ以上の慈しみを持って、いまだ何の後見関係もない紫の上を「幼き人」と捉える背景には、藤壺の面影との重なりを指摘できる。

ところで、先に見たように若紫巻では、当初紫の上に対して「女子」や「子」など「子」系呼称も繰り返し用いられていた。これは、紫の上の身元・社会的位置づけの不明さの強調ばかりでなく、そもそも紫の上が誰の子であるのかを、源氏が非常に気にかけていたことのあらわれであった。そして当初尼君の「女子」と誤認してしまった源氏は、紫の上を「かの大納言の御むすめ」(若紫二二二)、つまり尼君と大納言の間の子かと僧都に尋ねている。このときの源氏は、少女に藤壺との血縁関係があることまでは期待しておらず、それでも大切な「ねびゆかむさまゆかしき人」と考えているのである。結局、この少女は尼君の孫であり、藤壺の姪であるという血筋が明かされるのだが、「女子」

をめぐる源氏のささやかな錯覚を追っていくと、当初は、藤壺との血の繋がりゆえに紫の上に惹きつけられたわけはなかったことが窺い知れる。「あまた見えつる子どもに似るべうもあら」ぬ、際立った魅力を持ち、加えて藤壺に「いとよう似たてまつれる」似通いゆえに、源氏は少女を特別な存在として意識していったのである。

さらには若紫巻において、二度も源氏が紫の上を心のうちで「幼き人」と呼ぶ姿には、誰の子であるかという血縁の問題ゆえではなく、「かぎりなう心をつくしきこゆる人」の面影を宿す「ねびゆかむさまゆかしき人」ゆえに、手元に引き取る前から少女を愛しく見つめずにはいられなかった、何とかして手元に引き取り大切に慈しみたいと願っていた、源氏の心情が投影されていると考えられる。

五

紫の上に用いられる「若草」「初草」の呼称は和歌に詠み込まれたもので、紫の上の幼さや瑞々しいあどけなさを端的に表現した呼称となっている。あと数年経てば分別もつく十歳という大人と子どもの狭間にある紫の上を、より子ども子どもした存在として印象を強める効果があり、若紫巻全体を通して揺曳する紫の上の生き生きとした生命力が集約されている。

雀の子を逃がしてしまったという訴えには少女ならではの価値観があり、走りながら顔を真っ赤にして泣く姿には溢れるエネルギーが感じられる。芽吹いたばかりの初草や柔らかく伸びてゆこうとする若草に紫の上が重ねられるゆえである。しかし一方でそれは、少女が大人社会とは隔絶したところにあることを意味するのであり、尼君の眼には悲しいほど幼く映るのである。少女のもとから逃げてしまった雀は、鳥に襲われることを危惧されている。尼君の庇護を失い、社会に放たれたあとの紫の上の危うさを暗示するかのようである。「若草」「初草」の呼称は、紫

の上の幼さを捉える文脈の中で、少女を慈しむ祖母と乳母によって与えられている。

生ひ立たむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えんそらなき（若紫二〇八）

初草の生ひゆく末も知らぬ間にいかでか露の消えんとすらむ（若紫二〇八）

従来この呼称には、『伊勢物語』四十九段との関連が指摘され、源氏と紫の上に近親相姦的な禁忌性のイメージが投影されると読み解かれている。しかしながら、この場面において、紫の上を「若草」「初草」に準えているのは尼君と女房であり、まだ育ちきらない少女を「若草」に、余命いくばくもない自分を「露」に喩える尼君と、それを受けて「初草」と詠みかえて返歌をする女房とのやり取りには、少なくとも尼君と少納言自身の意識のなかには、禁忌のイメージは存在しないと見るのが穏当であろう。

ところが、源氏が藤壺の姪という素性を知ったのちに、このときの贈答歌をふまえて紫の上を「若草」「初草」と呼び重ねていくのには、ただ幼い、若い、というにはとどまらない意味合いが呼び込まれてくると考える。

初草の若葉のうへを見つるより旅寝の袖もつゆぞかわかぬ（若紫二一六）

この歌は、紫の上の素性を僧都から聞き知った夜に源氏が尼君を訪れて詠む歌で、先に盗み聞いた歌をもとに紫の上を「初草の若葉」（はつかに見た若々しい少女）に喩え、「さるにては、かの若草を、いかで聞いたまへることぞ」（若紫二一六）と尼君にいぶかしまれることになる。ここで源氏が「初草」「若草」を引用し、先の場面を垣間見たことをわざわざ知らせたのはなぜであろうか。源氏は尼君たちの贈答歌によって、頼るものを「露」と失おうとする幼い「若草」「初草」の少女の境遇を知ったが、これは、幼くして母や祖母に先立たれた源氏自身のそれと通じる境遇であった。源氏が「初草」「若草」を引用した和歌を詠みかけたのには、単なる恋情の表れではなく、むしろ保護者に先立たれようとする少女への、他人事ではない同情を込めたのであり、尼君や乳母と同じ慈しみの念を投影しているの

であろう。

そればかりでなく、源氏の引用には、『古今和歌集』の「春日野の雪間をわけておひいでくるはつかに見えし君はも」(四七八)の「初草」、『伊勢』十二段の「武蔵野は今日はな焼きそ若草の妻もこもれりわれもこもれり」の「若草」にあるような瑞々しい女性の喩としての響きが汲み取れる。思えば、藤壺の姪であることを知った源氏にとっては、紫の上の存在はただの「初草」(はつかに見た若々しい少女)にとどまらず、藤壺の面影を宿す「初草」として映ったに違いない。源氏が紫の上ゆえに「旅寝の袖」を濡らすのは「限りなう心を尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる」(若紫二〇七)ためであり、尼君や女房の抱く、幼さを残す少女への不安と慈しみを引き受けながら、藤壺への想いを無意識に重ねた上で「初草」の成長を願っているのである。

尼君の承諾を得られぬままに都に戻った源氏は、葵の上との冷めた仲に辟易し「この若草の生ひ出でむほどのなほゆかしきを」(若紫二二七)と紫の上に思いを馳せる。

このとき源氏は、「兵部卿宮は、いとあてになまめいたまへれど、にほひやかになどもあらぬを、いかでかの一族におぼえたまふらむ」(若紫二二七)と、紫の上と藤壺との繋がりに強い関心を抱いているのだが、これは、兵部卿宮の娘つまりは藤壺の姪であるというような、単純な血の繋がりで説明できまい。紫の上には藤壺との血縁を超えて通底する深い繋がりと似通い、魅力があるのである。ここでは、「初草」(はつかに見た若々しい少女)から「若草」(若々しい女性)に呼びかえられており、この「若草」には「藤壺の若草」の意が重ねられている。葵の上との不和が、自ずと源氏の気持ちを紫の上へと誘うのだろうか。正妻との息の詰まるような生活が、真に心を寄せる藤壺への気持ちを増かすに上らせ、その藤壺の「若草」である紫の上が早く育ち、妻として迎えることを望む気持ちとしてあらわれていくのである。

源氏が紫の上を藤壺に重ねた上で引き取りたいと望んでいくことは、「あながちなるゆかり」（若紫二三九）という呼称に明らかで、紫の上への執着は、

手に摘みていつしかも見む紫のねにかよひける野辺の若草（若紫二三九）⁽⁶⁾

の歌にあからさまに詠み込まれることになる。紫草の紫が藤の色を指し、紫の上がそのゆかりの若草であるという発想は、尼君の歌から「若草」の呼称を引き続けながら、純粹に年端もゆかない孫を「若草」に喩えた尼君の趣旨とは、もはや全く次元の異なるものとなっている。

「若草」「初草」は、生命力の象徴でありながら、尼君と乳母にとっては行く末を不安視する心が込められた慈しみの呼称であった。一方で、源氏の目に少女が「初草」「若草」と映るとき、それが美しい女性の喩であることが浮き上がり、紫の上は恋の対象として捉えられてゆくのである。少女の後見となることを望む源氏には、ただ美しい女性を恋するのとは違う、藤壺のように自分の手で育てあげたいという執着を読み取ることができ、少女を藤壺の代わりとして望んでいることが窺える。そこには最初から紫の上が藤壺の「初草」「若草」と映り、恋の想いと無縁ではない眼で見つめている源氏の心情も織り込まれている。その源氏の心情を考えるに至ると、改めて『伊勢』との関連を指摘することができるのである。『伊勢』は「うらなく」思っていた妹の信頼をよそに、自分の妻としたいという眼で見ていた男の恋物語であり、その妻の姿は源氏に信頼を寄せる紫の上の姿に重ねられる。このあたりの源氏の心の動きには『伊勢』四十九段の描くような禁忌の恋に惹かれていく傾きが窺える。この禁忌性は、四十余りの尼君への関心、十歳ばかりの少女への恋情、継母との許されぬ恋、どれか一つというのではなく、重なり合って呼び込まれているのである。

尼君と女房の贈答歌によって生まれた「若草」「初草」の呼称には、先に触れたように紫の上の若さや生命力が象徴

され、若紫巻における垣間見の場面、すなわち源氏と紫の上の出逢いの場面が凝縮されており、そのために、「い」とど、かの若草尋ねとりたまひてし」(紅葉賀三二六)と、紅葉賀巻においては若紫巻の物語世界を想起させる効果を担う呼称ともなり、再び、葵の上と藤壺と、どちらとも思うようにいかない源氏が、紫の上に救いを求めている構図が浮かんでくる。

源氏は、北山で尼君や女房が無事の成長を祈って「若草」「初草」と呼んだ少女を尼君たちと同様の慈しみの眼差しで捉えながら、尼君たちのおずかり知らないところで、藤壺の「初草」「若草」へと置き換えたのである。そもそもは、藤壺との繋がりを示す呼称ではなく、尼君たちの感情が創造した彼女たちだけに許される呼称であったもの、そこに源氏の藤壺への想いが重ねられ、藤壺と紫の上とを結びつける呼称へと変化したのだ。そこには継母や、幼い少女や、尼君などとの禁忌を孕んだ恋を求める源氏の姿があるのだが、「初草」「若草」という呼称は、それだけでないもっと繊細な源氏の心をえぐり出してくるのである。源氏は祖母と乳母との少女への慈しみ哀れみの心を引継ぐことになるのであり、またその乳母たちと同じ心になり得る理由には、藤壺との似通いを強く意識していることもあるのだが、似通いだけが紫の上の魅力なのではない。そのことが、「初草」「若草」という呼称が意味の重層性を持ちながら、定着していく課程のなかに示されている。すなわち、最初に尼君たちによって用いられ、その慈しみを引き受けるようにして源氏がこの呼称を用いていくあり方によってしっかりと示しているのである。源氏は、自分だけを頼りとし、絶対の信頼を与えてくれる存在として「若草」の紫の上を求めたのであろう。

六

北山ではじめて紫の上を見たとき、源氏は、他に遊ぶ子どもたちとの違いを紫の上を感じながら、「若君」という呼

称を用いていない。しかしながら、尼君の子であれば主人格の子となり、「若君」と捉えられるのが自然である。また「若君」と呼ぶ方が他の子どもたちとの相違もより鮮明となるはずである。

「若君」は身分ある子女に元服や裳着を待たず用いられ、対象が明確な身分の高い子ども（明石の中宮・空蟬の弟の小君・夕霧・女三の宮・薫など）に用いられている。「若君」の用例で年齢が確認できるものでは、明石の中宮一〜十四歳、紫の上一〜十二歳、夕霧一〜七歳、薫一〜十四歳となっている。小君の年齢は定かではないが、「十三ばかりなるもあり。」（帚木九六）とあり、『新全集』頭注の指摘からも十二、三歳と考えられる。

女三の宮に対しては二十一・二歳の頃に用いられており、かなり年長の時に用いられた、例外的用例であるが、

「いつの間に積もる御言の葉にかあらむ。いでや、安からぬ世をも見るかな」と若君の御過ちを知らぬ人は言ふ。

侍従ぞ、かかるにつけても胸うち騒ぎける。（若菜下二四七）

と、女三の宮の女房の目線によるもので、女三の宮の幼さが捉えられた特殊な用例であると考えられる。

女三の宮の例を除いて考えると、「若君」は一〜十四歳くらいまでの人物に用いられており、年少のものからある程度成長した人物にまで用いられる呼称であることが確認できる。

小君に関して使用する用例については、身分の高さという点に問題があるが、

「若君はいづくにおはしますならむ。この御格子は鎖してん」とて鳴らすなり。（空蟬一二三）

と、紀伊の守の女房が呼んだもので、小君は主の妻の弟であるから、女房から見れば貴人となるのである。

紫の上に話を戻すと、若紫巻において、「若君」という呼称が五例確認される。

（1）この若君、幼心地に、めでたき人かなと見たまひて、「宮の御ありさまよりもまさりたまへるかな」

（若紫二二四）

(2) 若君はいと恐ろしう、いかならんとわななかれて、いとうつくしき御肌つきも、そぞろに寒げに思したるを、らうたくおぼえて、単衣ばかりおしくくみて、わが御心地も、かつはうたておぼえたまへど、あはれにうち語らひたまひて、「いざたまへよ。をかしき絵など多く、雛遊びなどする所に」と、心につくべきことをのたまふけはひのいとなつかしきを、幼き心地にも、いいたうも怖じず、さすがにむつかしう寝も入らずおぼえて、身じろき臥したまへり。(若紫二四四)

(3) 若君も、あやしと思ひて泣いたまふ。(若紫二五五)

(4) 二条院は近ければ、まだ明うもならぬほどにおはして、西の対に御車寄せて下りたまふ。若君をば、いと軽らかにかき抱きて下ろしたまふ。(若紫二五五)

(5) 若君は、いとむくつけう、いかにすることなむとふるはれたまへど、さすがに声もたてもえ泣きたまはず、「少納言がもとに寝む」とのたまふ声いと若し。(若紫二五六)

紫の上に「若君」が用いられるのはいづれも紫の上の素性が明かされたあとのことである。

はじめて「若君」が用いられる(1)の例は、源氏を慕う紫の上に女房が源氏の子になるかと訪ねる場面で、紫の上が尼君のもとでは「若君」と呼ばれている様子が窺える箇所である。これは源氏の視線が捉えた呼称ではない。ところが、悪天候の夜に源氏が宿直を決め込む(2)に挙げた場面においては、源氏の視線で紫の上を「若君」と捉えている。また、(3)～(5)のように源氏が紫の上を引き取る場面でも繰り返し用いられ、「若君」という呼称が定着してゆく。なるほど尼君たちにとっての紫の上は「若君」であったはずで、登場当初から「若君」に呼称を統一すれば、紫の上の身分もすぐに明らかになり、正体も掴みやすく描けたはずである。にもかかわらず、紫の上にはこれまで確認したようにさまざまな呼称によって呼ばれ、いわば「若君」という呼称が避けられてきた。また、紫の上に「若君」

という呼称が集中しはじめるのは、紫の上が源氏の庇護下に置かれることがはっきりする引き取りの場面においてであり、若紫巻以降も、源氏の庇護のもとに「若君」が用いられることが注目される。

このほか、紫の上を呼ぶ際に多く用いられる呼称に「君」がある。若紫巻では紫の上に対して八例が用いられている。

「君」という呼称は会話文に多く用いられ、「いで君も書いたまへ」（若紫二五九）というように、紫の上本人に向かって「あなた」の意で用いられる呼称である。この「君」という呼称は、「若君」や「姫君」、「女君」といった複合型呼称を作る「君」が単独で用いられるものであり、多少の敬意が含まれると考えられるのであるが、

君は、男君のおはせずなどしてさうざうしき夕暮などばかりぞ、尼君を恋ひきこえたまひて、うち泣きなどしたまへど、宮をばことに思ひ出できこえたまはず。（若紫二六二）

という例では、源氏を「男君」と呼ぶのに対して、「若君」でも「女君」でもなく「君」が用いられている。「男君」と対しているが「女君」ではない、けれど幼く庇護されるだけの「若君」でもないという微妙な存在である紫の上の位相が上手く表現されている。

「若君」同様「君」も、やはり紫の上の素性が明かされてから用いられていることに注目されるが、敬意を内包する呼称がゆえに、登場初期にはあえて避けられたのだと考えられよう。

一方、若紫巻では紫の上に「姫君」という呼称は用いられないが、この「姫君」という呼称が避けられたことにも、同様の理由が指摘できる。「姫君」は「若君」と同じように身分ある人物に用いられる呼称で、「若君」との違いとしては、女性に限って用いられるという性別の縛りがあるという点が挙げられる。

「姫君」は具体的な登場人物に対してではなく、貴人の娘を指す一般名詞としても用いられる（若紫二二六・螢二二

三・梅枝四一四・竹河六八）が、多くは対象者が明確で、明石の中宮や朝顔の齋院、葵の上など、貴人の娘に用いられている。「姫君」が用いられる年齢を確認してみると、葵の上が二十一～二十六歳、宇治の大君が二十五～二十六歳まで、宇治の中の君が十四～二十二歳まで、雲居の雁十四～三十一歳まで、紫の上が十一～十八歳となっており、「姫君」が比較的成長した人物に用いられる呼称であることが窺える。

明石の中宮については例外で、三～八歳までに「姫君」が確認されるため、幼いうちから「姫君」と呼ばれていることになる。最初に「姫君」が用いられる薄雲巻（薄雲四三三）では、明石の中宮はまだ袴着も済ませていない。しかし、明石の中宮は源氏にとってただ一人の娘であり、后がねである。三歳でありながら、家の繁栄を担う入内を控えた大切な娘なのである。男女を問わず用いられる「若君」に比べ、「姫君」には女性的な条件が強く影響しており、それも、家の繁栄を期待され、家で大切にかしづかれる身分ある女性という意味を含んでいる。

一方で、北山での紫の上はいとけない子どもとして描かれ、結婚には程遠く、若紫巻全体を通じて「姫君」が用いられることはなかった。紫の上に対して「姫君」が用いられるのは末摘花巻（末摘花三〇六）以降のことで、この頃は紫の上が二条院での生活に慣れた頃であり、「姫君」は、二条院という場を基盤として用いられはじめるのだと考えられる。紫の上には、二条院において「対の姫君」という呼称が用いられ、この呼称についての詳しい考察は別稿に譲るが、紫の上がまずは「若君」と呼ばれ、源氏に引き取られ、その生活が二条院において定着するのを待ってやっと「姫君」と呼ばれることをここで指摘しておきたい。若紫巻における紫の上は、家同士の繋がりを強める結婚という社会秩序に与しない存在だったのである。

「若君」「姫君」「君」などの身分が明確となる呼称は、登場当初の紫の上には用いられず、身分的なものは伏せられたままに物語は進められた。やがて紫の上の素性が明かされるにつれ、「若君」等の呼称が用いられていくのである。

が、これは単に紫の上の正体が明かされ、その地位が定まったことを示しているのとどまらない。「若君」の登場および定着の過程を見てゆくと、紫の上を「若君」と慈しむ祖母や乳母の心を引き受けて呼称が用いられていることが確認され、源氏の庇護のもと、紫の上の社会的な位置が源氏によって支えられていくことが示されているのである。

おわりに

若紫巻において紫の上には多種多様な呼称が用いられていた。「若君」など身分的な制約を持つ呼称をはじめから用い、呼称を統一しておけば、紫の上の存在を尼君の庇護下にある「若君」として一義的に提示することが可能だったはずであるが、実際には十種類もの呼称によって、紫の上を呼び分け、存在を掴みどころのないものとしている。

北山での紫の上にくつもの呼称が駆使されたのはなぜであろうか。まずは、紫の上の素性を曖昧にし、紫の上を謎めいた存在、謎の少女として造型するためであったことが考えられる。若紫巻に登場した紫の上は、登場人物を知る手がかりとなるはずの「呼称」によって、逆に存在が臙化されているのである。

たとえば「女子」という呼称においては、「尼君の子」という誤った情報を提示することで、紫の上の素性は故意に歪められている。ただし多種多様な呼称による呼び分けは、紫の上の身元を臙化する効果のみを担ったわけではない。北山での垣間見による出逢いの場面に確認される「女子」「その子」などの「子」、系呼称や「人」呼称には、紫の上が誰の子であるかを気にする源氏の関心や、藤壺との似通いに心惹かれる源氏の感情が投影されていると考えられた。「女子」に限らず、「子」「若草」「初草」「幼き人」「人」「ゆかり」など若紫巻で用いられる紫の上の呼称には、謎めいているからこそ心惹かれる源氏の感情が投影されている。

別稿で触れたように、紫の上の用いられる「児」(若紫二〇九)という呼称にも、源氏の感情が強く投射されている。⁽⁷⁾

この「児」は、実のところ十歳の紫の上には本来ならば適さない呼称なのだが、源氏が藤壺の代わりとして紫の上を育てることを望み、一方で紫の上の持つ子どもらしさに救いを求めた源氏の心情が投影された呼称であるがゆえにあえて用いられたと考えられる。

紫の上の呼称がはじめから統一性を持っていれば、誤情報を表す不適切な呼称が用いられる余地はなかったはずだが、本来は適さない呼称までもが用いられた背景には、その呼称によって紫の上を捉えようとする源氏固有の心情を描こうとする物語の意図があるのである。すなわち、紫の上を「女子」「子」と捉えているあたりでは、なまめかしい尼君に惹かれている源氏の意識が臆に浮かび上がっている。ところが、「く人」呼称が示す藤壺との似通いの発見を契機に、紫の上をかけがえのない人、是非とも手元に引き取りたい「幼き人」、藤壺の「初草」「若草」として、藤壺を投影していく心の変化が読み取れる。そしてこの「幼き人」「初草」「若草」、及び最終的に統一されてゆく「若君」などの呼称が用いられてゆく経緯を見ると、いずれもまずは、尼君や乳母によって用いられ、後に源氏の視線を投影した呼称となっていく。つまり、尼君や乳母の紫の上への愛情や慈しみを引き受けるようにして、源氏が紫の上を引き取っていく経緯をも読み取ることができる。源氏の繊細な心の揺れが呼称によって上手く表現されているのである。紫の上を藤壺の種として愛し、一方で、尼君や乳母が少女を慈しんだように少女の生命力自体にも惹き付けられている源氏の心が、呼称が出現する順番や出現の経緯、場面叙述によって巧に造型されているのである。

結局のところ、十種類の呼称のそれぞれは、実は幼さばかりを意味するのではなく、なかには、年齢とは無関係の「女子（誰かの娘）」「子（誰かの子）」や、やや年長の「若草（若々しい妻）」なども混じっている。しかしながら、全体を通して考えたとき、若紫巻において描かれる紫の上自身の放つ幼さと呼応し、十種類の呼称全体で紫の上の若さや幼さを引き立たせる効果がある。それは、この偶然に出逢った、素性も知らない少女の澠刺とした生命力や藤壺と

の似通いなどに心惹かれながら、その素性を知ってもなお一元的には捉えようとしなかった源氏の眼を通して、呼称が選ばれているからに他ならない。これらの呼称は若紫巻の紫の上を見つめる源氏の心の動きを生き生きと描写する呼称なのである。

注

- (1) 『源氏物語』 本文は『新編日本古典文学全集』による。
- (2) 『源氏物語』に見られる「人」呼称については、すでに倉田実氏の一連の研究があり、紫の上の「人」呼称については、「光源氏の女君」「人」表現による造型——(『大妻国文』20、一九八九年三月)
- 「紫の上と「人」表現——物語第二部における——」(『源氏物語の探究』第十五輯 風間書房、一九九〇年二年一〇月)の中で触れられている。
- 倉田氏は、一回的でなく用いられる「幼き人」を論考から除いておられるが、本稿では、「幼き人」にも他の「人」呼称と同様の特徴を見ることができると考え考察する。
- (3) この用例は『CD-ROM 角川古典大観 源氏物語』の呼称検索においては、紫の上の呼称とはされていないが、私に呼称として加える。「幼き人」という呼称は、他の用例から対象人物が明確な場合に用いられる呼称だと考えられるため、ここでも一般名詞的な用いられ方ではなく、紫の上を指して用いられていると考える。
- (4) この用例は『CD-ROM 角川古典大観 源氏物語』の呼称検索においては、紫の上の呼称とはされていないが、私に呼称として加える。
- (5) 石川徹「源氏物語若紫巻の構想に就いて」(『古代小説史稿』刀江書院、一九五八年五月)
- 三谷邦明「藤壺事件の表現構造——若紫巻あるいは〈前本文〉としての伊勢物語——」(『物語文学の方法Ⅱ』有精堂、一九八九年六月)
- 三村友希「いかなる草のゆかりなるらん——若紫の君と『伊勢物語』——」(『人物で読む『源氏物語』第六巻—紫の上—二〇〇五年八月)など

(6) この用例は『CD-ROM 角川古典大観 源氏物語』の呼称検索においては、紫の上の呼称とはされていないが、私に呼称として加える。

(7) 拙稿「児」と呼ばれた紫の上」(『東京女子大学 日本文学』第百四号、二〇〇八年三月)

(二〇〇八年十一月五日成稿)

(東京女子大学大学院博士後期課程人間科学研究科在籍)

キーワード

源氏物語、紫の上、呼称、若紫卷